

歐陽修・司馬光・劉放の詩話書

一

歐陽修^①が『詩話』^②、すなわちのちに『六一詩話』などいくつかの書名をもって称されることになる書を著したあと、司馬光は、のちに『温公統詩話』などと称されることもある『統詩話』^③を著した。その後、劉放が『詩話』^④を著した。これも『中山詩話』その他、いくつかの書名で呼ばれるのが普通である。北宋前期の詩話書で現存するものは以上の三書である。その後も詩話書は陸続と著述され続け、一つのジャンルを形成するに至るのであるが、彼らに三人にとつては、ジャンルとしての意識は生じていなかった。つまり、詩話書はどうあらねばならぬという考えはなかった。では、彼らはそれぞれの詩話書をどのような著述意識をもって著したか。まず『六一詩話』(以下、「欧話」とよぶ)の小序には言う。

居士退居汝陰、而集以資閑談也。^⑤

「集」の字が、それまでにどこかに書き留めておいたものを、この際に一か所に集めたということを表している。

豊 福 健 二

る。事実、欧話に記載された詩話のいくつかの則は、歐陽修がこれに先んじて著したいくつかの書に見える話題が基になっていると判断されるものがある。^⑥そして、連続する各則の間には、原則的に連関性が見られない。当時非常に流行していた筆記小説のスタイルとまったく同じである。このように無系統的に著述していくスタイルは、のちの詩話書に圧倒的に多く見られ、『滄浪詩話』などはむしろ例外的である。

また、「資閑談」の語は、詩論や詩評を積極的に展開することを意図したのではなく、ごく軽い気持ちで書いたということを表している。

『統詩話』(以下、「馬話」とよぶ)にも小序がある。

『詩話』尚有遺者、歐陽公文章名聲雖不可及、然記事一也、故敢統書之。^⑦

つまり、欧話を補い、またそれに続けて書いたというものである。ところで、ここで一つ問題にしなければならぬことがある。それは、司馬光は馬話を、欧話を補いそれに続く詩話書として書いたのか、それとも欧話の

話題を補い、それに続く筆記小説として書いたのかということである。前者であれば馬話の内容はすべて詩に関する話（すなわち詩話）でなければならぬが、後者であれば、欧話を補い、それに続くものであれば詩話でないもの（これを、仮に「非詩話」とよぶことにする）が混入してもよいことになる。

馬話の第三則（以下、「馬話3」というように表す）に次のようにある。

梅聖俞之卒也、余与宋子才選、韓欽聖宗彦、沈文通邁、俱為三司僚屬、共痛惜之。子才曰、「比見聖俞面光沢特甚、意為充盛、不知乃為不祥也。」時欽聖面亦光沢、文通指之曰、「次至欽聖矣。」衆皆尤其暴謔。不数日、欽聖抱疾而卒。余謂文通曰、「君雖不為呪詛、亦戲殺耳。」此雖無預時事、然以其与聖俞同時、事又相類、故附之。

これは欧話7の、

鄭谷詩名盛於唐末、号『雲臺編』、而世俗但称其官、為「鄭都官詩」。其詩極有意思、亦多佳句、但其格不甚高。以其易曉、人家多以教小兒、余為兒時猶誦之、今其集不行於世矣。梅聖俞晚年、官亦至都官、一日会飲余家、劉原父戲之曰、「聖俞官必止於此。」坐客皆驚。原父曰、「昔有鄭都官、今有梅都官也。」聖俞頗不樂。未幾、聖俞病卒。余為序其詩為『宛陵集』、而今人但謂之「梅都官詩」。一言之謔、後遂果然、斯可歎也。

に続くものとして書かれていることが明確である。

この件について、『四庫提要』の「続詩話」の項には、
惟梅堯臣病死一条与詩無涉、乃載之此書則不可解。
とあるが、これは、前者の立場に立つものである。これに対して郭紹虞は『宋詩話考』において、

則是温公之統、正指此類而言。

といい、さらに『四庫提要』は『続詩話』の「続」の意味がよく解っていないからだとしりぞけている。郭紹虞の説は一見正しいように思えるが、もしもその説に従うのなら、欧話を継ぐものであれば詩話・非詩話にかかわらず、すべて馬話の題材となりうるということになり、可能性としては、かなりの数の非詩話が存在してもよいことになるが、そのような例は3以外にはない。また、「此雖無預時事、然以其与聖俞同時、事又相類、故附之」と明確にそれが例外的だと述べているので、著者の意図としては、やはり純粹の詩話書を書こうとしたことがわかる。

『中山詩話』（以下、「劉話」とよぶ）には、前二書に見られたような序はない。しかし、その書名が欧話と同じく『詩話』であること、そしてその中に欧話・馬話を継ぎ、或いはそれを意識して書かれた則が多く見られるところから、それらを模倣して著した書であることは確かである。

以上から、欧話は詩に関する話を「資閑談」の目的で著したものであり、馬話は欧話に継ぐ詩話書を著そうと

したのであり、劉話は欧話・劉話のような詩話書を念頭において著したであろうことが推測される。

二

清の章学誠は『文史通義』「詩話」において、詩話を「論詩及事」（略して「論事」）、「論詩及辞」（略して「論辞」）の二類に分類した。この二つの語はその後も詩話を論ずるときしばしば用いられており、またこの分類法には合理性があり、今なお有効である。簡単に言えば、前者は詩に関する話題を客観的に記録したものである。後者は詩に関することがらをめぐって主観的な意見を述べたもので、詩論・詩評などがこれに相当する。

次に、欧・馬・劉のそれぞれの詩話書において、「論事」の詩話と「論辞」の詩話とが、どのような状況で載せられているか見てみることにする。なお、三家の詩話書の則数は、それぞれ二十八、三十一、六十六であり、ほぼ、一対一対二の比率になる。則の長さは、欧話での最短は六十七字、最長は三百二十四字、馬話ではそれぞれ三十一字、四百二字、劉話では二十字、二百四十三字である。また、葉数を『歴代詩話』本によって見ると、欧話は十四葉の前半まで、馬話は十一葉、劉話は二十三葉である。

まず、詩論・詩評にわたる則を、それぞれの詩話書において挙げると、欧話では3 4 5 7 9 8 10 11 12 13 15 16 18

19 20 21 22 23 24 26 27の二十一則、馬話では2 4 7 8 14 16 18 19 23の九則、劉話では2 3 5 7 8 9 12 16 17 18 19 21 22 24 26 28 40 64の十八則がそれである。

これらの中には、本格的な詩論あるいは詩評ではなく、話のついでに漏らされた著者の思いつきに近いものもあれば、ある詩人のある詩句をとりあげて、印象批判的に感想を述べた程度のものも含まれている。むしろ、そのようなものの方が多いと言った方がよいであろう。また、「論事」と「論辞」とが同一の則に現れることも当然ありうる。いま、強いて言えば詩論・詩評の範疇に属すると見なされるという程度の短い記述の例をいくつかを示そう。

欧話

4 「此詩作於罇俎之間、筆力雄贍、頃刻而成、遂為絕唱。」

21 「其不用故事、又豈不佳乎。」

馬話

4 「亦為時人所伝誦、誠難得之句也。」

7 「曲尽梅之体態。」

劉話

3 「雖不用事、意思宏深、足為警語。」

9 「僕以謂不減劉長卿。」

三書は、もしもこれらを詩論書・詩評書と見ようとするならば、期待が外れるであろう。そして、今一つ重要なことは、後世の詩話書の中には、詩論書・詩評書とし

て純化されたものが多く見られるようになるが、この三家の詩話書の中にはその変遷の経過はまったく見られず、むしろ逆行しているとも言えることである。上に示した則の数で単純に理解することは危険であるが、詩論・詩評が含まれる則の数が、欧話では71%、馬話では29%、劉話では27%という比率も、ある程度は物語っている。これに詩論の当否や詩評の質を考慮するならば、いっそうその感を強くする。つまり、欧話に続く馬話・劉話は、それぞれ欧話を意識しつつも文学論・文学批判としての深化ということにはほとんど関心がなく、筆記小説の特殊な形態としての詩話書を、ただ筆の向くままに著したのだと言えよう。

次に、詩論・詩評としてある程度まとまった見解を述べるものを示そう。まず欧話からである。

12 聖俞常語予曰、「詩家雖率意、而造語亦難。若意新語工、得前人所未道者、斯為善也。必能狀難写之景、如在目前、含不尽之意、見於言外、然後為至矣。賈島云、『竹籠拾山果、瓦甌坦石泉。』姚合云、『馬隨山鹿放、鷄逐野禽棲。』等是山邑荒僻、官況蕭条、不如『果古槐根出、官清馬骨高』為工也。」余曰、「語之工者固如是。狀難写之景、含不尽之意、何詩為然。」聖俞曰、「作者得於心、覽者会以意、殆難指陳以言也。雖然、亦可略道其髣髴、若嚴維『柳塘春水慢、花塢夕陽遲』、則天容時態、融和駘蕩、豈不如在目前乎。又若温庭筠『鷄声茅店月、人跡板橋

霜』、賈島『怪禽啼曠野、落日恐行人』、則道路辛苦、羈愁旅思、豈不見於言外乎。」

これは、欧話における詩論として最も密度の高いものであり、その後の詩話書に多大な影響をもたらしたものである。

馬話で純粋な詩論・詩評と認めうるものは次の則くらいである。

16 『詩』云、「牂羊墳首、三星在留。」言不可久。

古人為詩、貴於意在言外、使人思而得之、故言之者無罪、聞之者足以戒也。近世詩人、為杜子美最得詩人之体、如「国破山河在、城春草木深。感時花濺淚、恨別鳥驚心」。山河在、明無餘物矣、草木深、明無人矣、花鳥、平時可娛之物、見之而泣、聞之而悲、則時可知矣。他皆類此、不可徧舉。

劉話の中から、しばしばその代表的な則と指摘されるものを挙げてみよう。

8 詩以意為主、文詞次之、或意深義高、雖文詞平易、自是奇作。世効古人平易句、而不得其意義、翻成鄙野可笑。盧仝云「不即溜鈍漢」、非其意義、自可掩口、寧可効之耶。韓吏部古詩高卓、至律詩雖稱善、要有不工者、而好韓之人、句句稱述、未可謂然也。韓云、「老公真箇似童兒、没井埋盆作小池。」直諧戲語耳。歐陽永叔、江隣幾論韓「雪詩」、以「隨車翻縞帶、逐馬散銀杯」為不工、謂「坳中初蓋底、凸処遂成堆」為勝、未知真得韓意否也。永叔云、「知

聖俞詩者莫如某、然聖俞平生所自負者、皆某所不好、聖俞所卑下者、皆某所稱賞。」知心賞音之難如是、其評古人之詩、得無似之乎。

これは、かなり著者の見解がよくあらわれている則である。ところで、私はここに見える欧陽修あるいは欧話批判に注目してみたい。「永叔云」は欧話20に、

晏元献公文章擅天下、尤善為詩、而多稱引後進、一時名士往往出其門。聖俞平生所作詩多矣、然公獨愛其兩聯、云、「寒魚猶著底、白鷺已飛前。」又「絮暖鯨魚繁、鼓添蓴菜紫。」余嘗於聖俞家見公自書手簡、再三稱賞此二聯。余疑而問之、聖俞曰、「此非我之極致、豈公偶自得意於其間乎。」乃知自古文士不独知己難得、而知人亦難也。

とあるのをふまえて、欧陽修に鑑賞眼がないことを皮肉つている。このように、欧話を批判する則は劉話に多見する。別の例を示そう。劉話2に、

劉子儀贈人詩云、「惠和官尚小、師達祿須干。」取柳下惠聖之和、師也達、而子張學干祿之事。或有除去官字示人曰、「此必番僧也、其名達祿須干。」聞者大笑。詩有詩病俗忌、当避之。此偶自諧合、無若輕薄子何、非筆力過也。

とある。これは、欧話21に、劉筠について「蓋其雄文博學、筆力有餘、故無施而不可」とあるのを意識し、それを暗に皮肉つているのである。ただし、劉放が「師也達」というのは『論語』先進の「師也辟」を誤って記憶して

いたものである。このような誤謬は劉話に特に多く、すでに先人によって指摘されている。それはともかく、何らかの意味で欧話に批判的な則で、上の二例以外のものを次に挙げる。

7 「人多取佳句為句囚」の則は、欧話12で欧陽修が激賞した嚴維の「柳塘春水慢、花塢夕陽遲」には欠点があることを指摘し、杜甫の「深山催短景、喬木易高風」などの方が完璧だという。

12 「李絢公素有詩贈同姓人曰」の則は、欧話16の「賤工末芸得所附託、乃垂於不朽」をとらえて皮肉ったものである。

17 著者は、欧陽修が杜甫を好まなかったと考えていたので、例を引いて欧陽修の矛盾をついている。

18 「孟東野詩、李習之所稱」の則は、欧話19に韓孟の聯句が傑出したものだとあるのに対して、孟の作は韓愈が潤色したものだという説を挙げる。

22 「管子曰、『事無終始、無務多業。』」の則は、欧話11で晩唐の周朴が詩作に苦心したことを述べるのに対し、杜甫もそうであったという。なお、「事無終始、無務多業」は『管子』ではなく『孔子家語』の語である。

これらからわかるように、劉話に見える詩論・詩評は欧話を意識して、それに異を唱えるものが多く含まれている。しかも、単なる思いつき程度のものや印象批判的なものではなく、どちらかというと、(論拠に誤謬があ

ることは多いにしても) 理路整然とした手堅い則にそれが多く見られる。爾後、詩話書は、単に話題を継承するほかに、先行する説に対する批判・反批判を重ねていくことになるが、その最初は劉話であるということができ。馬話はその小序に見たように、歐陽修に対して非常に謙虚な姿勢を示しているので、欧話に対して批判的な立場を示す則が見られないのは当然であろう。

三

三書について「論事」の状況、すなわち客観的なことながらどのような記述されているかを見てみる。それには、詩話に現れた考証という側面から分析することも一つの方法であろう。詩話書における考証には二方面がある。その一つは他の文献などを論拠として詩句の解釈、詩人の伝記、文字の異同、音韻・俗語・方言などを考証するものである。他は逆に詩句を論拠として歴史的事実などを考証するものである。前者は詩に密着したものであるかぎり、詩話として何ら違和感がない。後者は詩学を中心とした立場からは雑学に属するので、詩話書に載るのが不自然と言えなくもない。

まず、他の文献などを論拠として詩句・詩人などについて考証するものを、詩話書ごとに挙げる。

欧話

1 李文正公「永昌陵挽歌辞」の「奠玉五回朝上帝」

の「五」は「三」の誤りであることを考証する。

17 李白「戲杜甫」の「借問別来太瘦生」の「生」は、唐人の俗語であることなどについて考証する。

25 王建「霓裳詞」の「聽風聽水作霓裳」の意味がわかりにくいことを指摘する。

馬話

5 韓欽聖「勳門賜立戟詩」の文字の異同を指摘する。

劉話

6 王禹偁の「江豚詩」などに込められた譏りの意を説明する。

15 李商隱の「錦瑟詩」の意味についての説を挙げる。

18 孟郊の詩集が編集された過程について考証する。

20 白居易の詩句「請錢不早朝」の「請」の字などについて考証する。

32 方言に用いられる文字「旗」「蒸」「塵」などについて考証する。

40 李翱の詩とされるものについて真偽を考証する。

43 唐人は「互」を「牙」と書き、それが「牙」に誤ったことなどを考証する。

45 欧話が不明とした「末厥」の意味を考証し、^⑩さらに他の俗語におよぶ。

52 杜甫の「功曹無復歎蕭何」^⑪の句は史実として誤りであることを、文献を挙げて考証する。

54 宋次道「次西都詩」の野狐落は、唐代に宮人の居住していたところであったことという。

58 「也」字の音が「夜」であることなどについて考証する。

45 は、欧話17において陶穀の「尖簷帽子卑凡廝、短靴靴児末厥兵」の「末厥」の語が当時の俗語らしいものの意味が不明であるとして対して解決を与え、さらに別の俗語の解釈も添えている。また、52の「曹参嘗為功曹、而杜詩云『功曹無復歎蕭何』、誤矣」については、『四庫提要』以来、その非が指摘されている。

次は、詩句を論拠として歴史的事実などを考証するものである。

欧話

3 京師・西京の士大夫たちの勤務の様子が詩に現れていることを言う。

16 王建の「宮詞」によって滕王元嬰が蛺蝶の絵に巧みだったことがわかることを言う。^⑩

馬話

1 文徳殿に朝する朝士の一人が、その辛い生活の様子を詩に歌っていることを言う。

30 杜甫の墓が、耒陽から鞏県に改葬された状況について、鄭文宝の詩によって考証する。

31 韓偓の詩によって過馬廄について考証する。

劉話

25 蹴鞠に使う鞠の製法を、詩文などによって考証する。

34 泗州塔の下に僧の遺骸が蔵されていることを、韓

愈の詩などによって考証する。

35 伝書鳩や、手紙を届ける黄耳という「神犬」について考証する。

48 歌舞飲酒について、張説や李白の詩によって考証する。

62 唐人の酒令について、韓愈や白居易の詩によって考証する。

これらは、詩句は引用されているが、それは雑学の資料に用いられているに過ぎないと言ってもよい。ただ、欧話の二則については少しく考察を加える必要がある。

3 は、単に詩によって両京の様子がうかがわれるというだけではなく、その詩が当の士大夫によって書き残されたということ、さらにその詩の評価まで「其語雖淺近、皆兩京之実事也」というように添えられている。この則を模倣した馬話1には評価の語はない。16の「宮詞」は、それによって滕王元嬰のことがわかると言っているのに、この部分は単なる絵画史に関する事のように受け取られるが、この則は、他の同様の例も挙げ、結論は「當時山林田畝、潜徳隠行君子、不聞於世者多矣、而賤工末芸得所附託、乃垂於不朽、蓋其各有幸不幸也」であって、詩人によってさまざまな技芸をもつ人物のことが後世に伝わることもあるという、詩の効用を述べたものである。したがって、則全体から見れば詩との関連性は極めて強いものといえる。これらには、純粹な詩話書を著述しようとする著者の立場があらわれていると言ってもよい。

馬話30の杜甫の墓に関する考証は、詩人の伝記の考証でもあるので、詩話以外の雑学とも言えない側面はある。そして、1は欧話3を継承するものであった。31が雑学に近いと言える。

以上は考証という側面からの考察であった。その量において、劉話が他を大きく引き離していることが指摘される。その理由については、たんに劉放の性格によるのか、歴史学者で博学であったからというだけではない。欧陽修も司馬光も歴史学者であったから、そのように考えるのは説得力としては薄弱である。この件については後に考察したい。

次は単に事実を伝える詩話について見てみよう。これには、詩人の逸事、詩壇の動向、警句や特徴的な詩句などを述べるものが含まれる。警句や特徴的な詩句を紹介するものは、簡単な解説をとまなうものとする。むろん、詩論・詩評にわたる則は含まない。するとこれに相当するものは、欧話では2 6 14 28の四則、馬話では6 12 13 15 17 20 21 22 24 25 26の十一則、劉話では10 11 12 14 16 23 27 29 30 31 33 39 44 46 47 50 55 60 63 65の二十則がそれである。

この中から、欧話2を例として示す。

仁宗朝、有数達官、以詩知名。常慕「白樂天体」、故其語多得於容易。嘗有一聯云、「有禄肥妻子、無恩及吏民。」有戲之者云、「昨日通衢遇一輜駟車、載極重、而羸牛甚苦、豈非足下『肥妻子』乎。」聞者伝以為笑。

白居易に倣って平易な詩を作り、得意になっていた高官が、自分が訴えようとしたのはまったく別の意味に解釈され、笑いものになったという、欧話の中で最も笑話的要素の強い則である。しかし、単なる諧謔ではなく、白樂天体に対する著者の批評が込められていると見ることができる。

また欧話14は、呂蒙正が作った「挑尽寒燈夢不成」の句が胡旦に笑われたことが記されている。この句に対する胡旦の嘲りを紹介することによって、呂蒙正の詩が白樂天体であって、それに対する欧陽修の批判を込めたことが読みとれる。

さらに欧話6を掲げてみる。

吳僧贊寧、国初為僧録。頗読儒書、博覽強記、亦自能撰述、而辭辯縱横、人莫能屈。時有安鴻漸者、文詞雋敏、尤好嘲詠。嘗街行遇贊寧与数僧相隨、鴻漸指而嘲曰、「鄭都官不愛之徒、時時作隊。」贊寧応声答曰、「秦始皇末坑之輩、往往成群。」時皆善其捷對。鴻漸所道、乃鄭谷詩云、「愛僧不愛紫衣僧」也。

これも単なる笑話のようではあるが、鄭谷の詩が人口に膾炙していたことの証明ともとれ、ひいては欧陽修自身に、鄭谷の詩の価値を広く知らしめたいという意図があったとも読みとれる。したがって、文章の中に著者の評価を示す語があるか否かのみをもって、ただちに詩評の要素があるかどうかを判断することは困難である。

次に、前後に説明的な要素をまつたくもたずに、単に警句などの紹介をするのみの則を挙げてみる。これに相当するものは欧話にはなく、馬話には9 10 11 27の四則があり、劉話には1 4 13 37 38 41 49 51 53 57の十則がある。

馬話9は次の通りである。

丁相謂善為詩、在珠崖猶有詩近百篇、号『知命集』、

其警句有「草解忘憂憂底事、花能含笑笑何人」。少

時好蹴鞠、長韻其二聯云、「鷹鵠騰雙眼、竜蛇繞四

肢。躡來行數步、蹶後立多時。」

また、劉話4は次の通りである。

景祐末、元昊叛、夏鄭公出鎮長安、梅送詩曰、「亜

夫金鼓從天落、韓信旌旗背水陳。」時独刻公詩於石。

馬話9には「警句」の語があり、劉話4には客觀的事実としての「時独刻公詩於石」があるが、著者自身の詩に対する評価の語はない。しかしながら、取りあげたことで、消極的ではあるが、著者の評価が反映されていると見ることもできる。

ところで、先に馬話3が非詩話であることは指摘したが、そのほかに宗袞の言語の巧みさを記した29もこれに属する。『四庫提要』では『涑水記聞』からの混入があったかもしれないと指摘するが、それは3の方についてであつて、29への言及はない。逆になければならぬ。

劉話には非詩話がさらに多く、六則を数える。

36 (築城法)、42 (言語の巧みさ)、45 (俗語の解
釈)、56 (何仙姑の事跡)、59 (言語の巧みさ)、66

(李士寧の事跡)

このうち42を紹介する。

員外郎上官必嘗勸石少傅中立慎緘、石勃然曰、「上官必如下官口何。」

あたかも『世説新語』言語篇でも読んでいるような趣である。

また、則の前半は詩話であるが、後半は前半とはほとんど関係のない非詩話であつたりするもの、あるいは、強いて見なせば詩話と見なせないこともないといった程度のももある。これは馬話にもある。

馬話6 (鮑当の逸事)、28 (初学記に関して)

劉話25 (蹴鞠について)、32 (方言「旗」「蒸」「塵」
など)、33 (言語の巧みさ)、35 (伝書鳩・犬の「黄

耳」)

馬話6は、欧話28の「采侯詩」を継ぐ話として紹介したあと、ついでに笑話に及んだという性格のものである。馬話28は次の通りである。

唐明皇以諸王從学、命集賢院学士徐堅等討集故事、
兼前代文辞、撰『初学記』。劉中山子儀愛其書、曰、
「非止初学、可為終身記。」

『初学記』は詩語を選ぶための書として作られたものであるから、詩話と無関係ではないが、牽強付会の感を免れまい。

以上から、馬話は欧話に比べて詩話書としての純粹性に欠けていると言える。

さて、劉話にはなぜこれほど非詩話が多いか、その理由としては次のようなことが考えられる。それは、歐陽修には筆記小説として『帰田録』があり、司馬光には『涑水記聞』があるので、非詩話を詩話書に載せる必要がなかったのに対し、劉敞は筆記小説を著さなかったもので、詩話書の中に雑学をまじえたと推測するのである。劉話の中でも後半部に非詩話が多いのは、劉敞自身も詩話書に雑学が混入するのを適当でないと考えたからである。

また、先に指摘した、詩句を論拠として歴史的事実などを考証する則は、詩話として致命的な問題はないものの、劉話でそれに相当する25（蹴鞠）、34（泗州塔）、35（伝書鳩など）、48（歌舞飲酒）、62（酒令）は、いずれも典型的な雑学である。これらも劉敞に筆記小説があればそれに記載された可能性のあるものである。非詩話あるいは非詩話に近い則のなかで諧謔にわたる42 59 33も、それらと同一視してよいであろう。

四

ここでは三家の詩話書について、取りあげられたテーマという観点から検討してみる。

諧謔にわたることが、あるいは人物の逸事は、筆記小説に見える特徴的なテーマであるが、これらが三家の詩話書ではどうなっているか見てみよう。なお逸事は、

ここでは、単にある人物がこのようなことを言ったという程度のもではなく、人物の特徴ある事跡を描いたもの、興味深い対話に重点がおかれているものなど、小説的なふくらみをもつものと限定する。まず、諧謔にわたることがらをもつ則は、欧話では2 6 14 15 27の五則、馬話では2 6 19の三則が、そして劉話では2 11 27 29 30 33 39 41 42 44 59 63の十二則がそれである。そして、人物の逸事に関するものは、欧話では2 6 7 8 9 14 20 24の八則、馬話では3 5 6 8 12 15 19 20 21 22 24 25の十二則が、そして劉話では5 10 11 14 16 17 23 24 26 27 29 30 31 39 44 46 47 50 55 59 60 63 64 65 66の二十五則がそれである。

こうして見ると、三書とも特に差異はなく、筆記小説的要素を十分に備えていると言つてよい。志人小説的要素を含むものも多い。ところで、隠逸をテーマとしたもの、神異にわたるものとなると様相が異なる。隠逸を好んで紹介するのは馬話であり、7（林逋）、8（魏野）、13（韓退）、17（劉概）、20（楊朴）、25（范景仁）、26（劉諷）の七則を載せている。欧話・劉話からは見出しがたい。一方、神異にわたるものは劉話にあり、14（呂洞賓）、24（王綸の女）、35（神犬「黄耳」）、50（石曼卿）、56（何仙姑）、65（張無夢）、66（李士寧）の七則を数える。この中の50の石延年は欧話24にも見える。ただし欧話では、

……曼卿卒後、其故人有見之者、云恍惚如夢中、言我今為鬼仙也、所主芙蓉城、欲呼故人往遊、不得、

忿然騎一素騾去如飛。其後又云、降於亳州一舉子家、又呼舉子去、不得、因留詩一篇与之。余亦略記其一聯云、「鶯聲不逐春光老、花影長隨日脚流。」神仙事怪不可知、其詩頗類曼卿平生語、舉子不能道也。のように、石延年の逸事を、石延年の友人からの伝聞として記録し、神異にわたる事柄への懐疑を示しているのに対し、劉話は、

石曼卿独行京師、一豪士揖之而語曰、「公幸過我家。」石許之、同入委巷、抵大第、藻飾宏麗、錦繡珠翠、殆非人間所擬。歌舞歛醉、丐書、為揮「籌筆賦詩」數篇。以金帛數百千贈之、復使騶從送還、恍然不知其誰。翌日、殆無復省所居矣。他日、遇諸塗、又遺以白金數兩、謂曰、「詩中『意中流水遠、愁外旧山青』、最為佳句。」

となっていて、神異に対する懐疑はない。他の則もほぼ同じ姿勢である。

隠逸への志向、神異に対する興味は、それぞれの著者の性格によるものであろう。

五

馬話・劉話に対して欧話が決定的に異なる要素がある。それをいくつかの項目に整理してみる。

まず、著者の体験が記されているものは、欧話では57 9 11 12 15 17 20 23 24 27の十一則であり、馬話では僅かに

3 12 24の三則、そして劉話では非詩話の66一則のみである。

次の欧話5などは、体験を記す典型的な例である。

蘇子瞻學士、蜀人也。嘗於涪井監得西南夷人所賣蠻布弓衣、其文織成梅聖俞「春雪詩」。此詩在聖俞集中、未為絕唱。蓋其名重天下、一篇一詠、伝落夷狄、而異域之人貴重之如此耳。子瞻以余尤知聖俞者、得之、因以見遺。余家旧蓄琴一張、乃宝曆三年雷会所斲、距今二百五十年矣。其声清越如擊金石、遂以此布更為琴囊、二物真余家之宝玩也。

欧話7 12 20 24、馬話3などは先に示した。

著者の体験と類似した面はあるが、著者と、詩話が話題とする詩人との交遊が記されているものは、欧話では、5 7 12 13 20 23 26の七則であり、馬話は12の一則、劉話は66の一則である。

さらに、著者と他人との議論の場が描かれていたり、それが反映されているものを挙げると、欧話には12 27の二則があるが、馬話・劉話にはない。欧話12は先に示した。

以上と関連したことではあるが、第一人称「余」「予」あるいは「僕」が使用されているものを数えてみると、欧話では5 7 9 11 12 13 17 20 23 24 27の十一則（「余」「予」が計二十六回）、馬話では3 12 24の三則（余が四回）、劉話では9 66の二則（「余」「予」が計三回、「僕」が一回）である。馬話は著者の体験が現れている則と一致す

る。劉話の9は「僕以謂不減劉長卿」である。著者が文章中に登場するというほどのものではない。66は先に非詩話として指摘したものである。

蜀人李士寧、好言鬼神詭異事。為余言、嘗泛海值風、

広利王使存問己。……士寧過予、予故默作念、侮戲

之竟日、士寧不知、惡在其通也。……

これは例外的であるが、非詩話ではある。

次に自作の詩が載せられているものを見てみると、欧話13（「水谷夜行詩」の一部）23（「春日西湖寄謝法曹歌」の一部）の二則のみがそれである。

以上から、体験・交遊・著者との議論の場・第一人称の使用・自作の詩、いずれをとっても欧話が他と大きく引き離していることがわかる。それは次のように解釈されるであろう。すなわち、欧話は歐陽修自らが詩人としての自覚をもち、つねに詩人としての立場から、詩という現象を主観的とらえていたこと、そしてみずからの近くに存在する文学的な事象を記述しようとしたからであるということである。詩人との交流が、他の二人に比べて多かつたであろうこともその理由となりうる。

欧話に特徴的なことの一つとして、比較的テーマが集まっているということも指摘できる。対象として取りあげる詩人として、回数が多いものを挙げると、梅堯臣が4 5 7 12 13 15 20 27の各則に登場し、二十八則中八則の多きにわたる。これに続き、杜甫・李白・韓愈・鄭谷・劉筠・蘇舜欽らが複数の則で取りあげられるが、梅堯臣は

第二位の杜甫の四回を大きく抜いている。劉話では韓愈の現れる則が七則で、これが最多であるが、内容的には軽く、また著者の韓愈に対する一貫した立場はない。馬話は梅堯臣の三回がかかるうじて目立つという程度で、広く多数の詩人にわたっているのが特徴である。これについて劉徳重・張寅彭氏の『詩話概説』（中華書局、一九九〇年）に、馬話には二十人が取りあげられ、基本的に一人一則であり、これが後の詩話書のスタイルの道を開いたことを指摘している。

さて、欧話において梅堯臣が多くの則に登場することが、とりもなおさず、著者の体験が記されている則、詩人との交遊が記されている則などの数を多くする要因の一つとなつていることが容易に理解されよう。また、梅堯臣を全面的に高く評価していることも見逃せない⁶⁶。先輩詩人として深く尊敬していたからである。

六

最後に、馬話・劉話が欧話からどの程度影響をうけているかを考察しよう。

馬話はその小序で、欧話を続けるために書いたと述べているが、実際にはどの程度であるかを見てみよう。

最初に、馬話が欧話所載の詩話を明らかに補足あるいは敷衍しているもの、または欧話を意識しそれをヒントとしていると思われるものを挙げると次のような則があ

る。

- 1 「文徳殿、百官常朝之所也」の則は欧話3「京師輦轂之下」の則の模擬である。
- 2 惠崇は欧話9で九僧の一人として紹介されているので、それを取りあげた。
- 3 「梅聖俞之卒也」の則は欧話7「鄭谷詩名盛於唐末」の則の「梅聖俞晩年、官亦至都官」の逸事と類似している。
- 5 「科場程試詩」の則は欧話28の「自科場用賦取人」の則を意識している。
- 6 「鮑当善為詩」の則で鮑当が「鮑孤雁」とよばれたという記事は欧話28で宋祁が「宋采侯」とよばれたという記事を意識している。
- 8 「魏野処士」の則の末尾に「豈非狀難写之景也」とあるのは、欧話12「聖俞常語予曰」で、梅堯臣が主張する見解を受けている。
- 16 「『詩』」云、「牂羊墳首、三星在罍」の則も前項と同じである。
- 18 「唐之中葉」の則は、欧話11「唐之晩年」の則に倣っている。
- 23 「元豊初、宦者王紳、効王建作『宮詞』百首」の則は、欧話16の王建の「宮詞」の記事に倣っている。
- 24 「歐陽公云、『九僧詩集』已亡」の則は欧話9「国朝浮図、以詩名于世者九人」の則を補足するものである。

このほか、14の「群臣進挽歌数百首」は、欧話1の「當時群臣皆進」とよく似ている。用語としては「曲尽」「道尽」「首出」などが欧話にも使用されていたが、その影響によるものかどうかは見定めにくい面もある。ちなみに、欧話で七回使用されていた「佳句」は、馬話には現れず、劉話に三回現れる。話題の上、あるいは語句の上での類似以外では、19に、

……蔡君謨嘗嘲之曰、「陳亜有心終是惡。」亜応声曰、「蔡襄除口便成衰。」

というのがある。先に挙げた欧話6に見える、鴻漸の嘲りに対する賛寧の捷対と同趣向のものである。

劉話が欧話を批判するものについては前述したが、そのほかに欧話を意識しヒントとするものもある。

28 「孟蜀時、花蕊夫人号能詩、而世不伝」の則は、欧話16の「王建宮詞」の則を継ぐものであるとともに、馬話23の王紳の「宮詞」の記事をも継いでいる。45俗語に関する話題が欧話17を継いでいることはすでに述べた。

50石延年の逸事を紹介するが、その中に出てくる「籌筆賦詩」は欧話24に見える。

5 「僧惠崇詩云、『河分岡勢断、春入烧痕青。』」の則は欧話9と馬話2の惠崇の記事を継承するものである。

20 「尖簷帽子卑凡廝」は「廝」の字を問題にしている、欧話17が「尖簷帽子卑凡廝、短鞞靴兒末廝兵」

の「末厥」を問題にしているのは異なるが、欧話の挙げる詩句からヒントを得て議論の題材とした可能性はある。

29 鄭谷の句を引用するのは、欧話67に鄭谷が見えるのをヒントにした可能性がある。ただし、劉攽が鄭谷の詩とする「任是深山更深処、也応無計避王徭」は杜荀鶴のものである。

こうしてみると、馬話が欧話に見える多数の詩話を補い敷衍しているのは当然としても、劉話も同様であることがわかる。すなわち、劉話はスタイルの面で、欧話・馬話を継承するのみならず、話題の多くもそれらを引き継いでいる。また、取りあげる詩や詩人の大部分が宋代であって、唐代の話題は少ない^⑩という特色も劉話に引き継がれている。馬話は意図的に欧話を継承したが、劉話が無意識的に欧話を継承した部分も多い。

(注)

- ① 「欧陽修」と「欧陽脩」のいずれが正しいかについて、私には、正式には「欧陽修」が正しいが、「欧陽脩」と書かれることもあり、自署もそうしたと理解している。なお、「欧陽修か欧陽脩か」(小林義廣氏著、『東海史学』三十一、一九九七年)という文章がある。
- ② 一〇七一年または七二年に成立。
- ③ 『詩話』成立以後から熙寧・元豊の間(一〇七一〜一〇八

五)に成立。

- ④ 欧陽修の『詩話』成立後の熙寧・元祐の間(一〇七一〜一〇九四)に成立。

⑤ テキストは天理大学附属天理図書館所蔵の南宋本『欧陽文忠公集』(国宝)所載のものにより、分則は、乾隆三十五年(一七七〇)刊の何文煥編『歴代詩話』本によった。

⑥ このことについては、拙論『六一詩話』の成立(『小尾博士古稀記念中国学論集』、一九八三年)を参照。

⑦ テキストは百川学海本『司馬温公詩話』により、分則は前掲『歴代詩話』本『温公統詩話』に従った。

⑧ 「時事」は「詩事」の誤りであろう。

⑨ テキストは百川学海本『劉貢父詩話』によったが、明らかなる誤りは前掲『歴代詩話』本『中山詩話』によって正した。分則は一九八一年中華書局刊『歴代詩話』本に従った。

⑩ それが正しい意味とは言えず、後の詩話書などには異説も見える。詳しくは拙訳『六一詩話』訳注(二)(『武庫川国文』第十八号、一九八〇年)を参照。

⑪ 杜甫の「奉寄別馬巴州」には、「功曹非復漢蕭何」とある。今本の劉話は後人による伝写の誤りであろう。

⑫ 欧陽修のこの指摘は誤りである。詳しくは『六一詩話』訳注(二)を参照。

⑬ 白居易の長恨歌に「孤燈挑尽未成眠」とある。

⑭ 「聖俞嘗云、『詩句義理雖通、語涉淺俗而可笑者、亦其病也。』」で始まるこの則は、全体が梅堯臣の所説の紹介である。欧話の他の則の例からすると、これは梅堯臣が欧陽修を目の前に

して語ったであろうことが推測される。

⑮ 「竜図趙学士師民、以醇儒碩学名重当時。為人沈厚端默、群居終日、似不能言」とある。著者が実際に趙師民と接したことがうかがえる。

⑯ 欧話に先だって欧陽修が記した『試筆』の中の欧陽修自身の言説に内容的に近いものが、欧話の中で梅堯臣の説として記されているという例がある。これについては前掲『六一詩話』の成立」を参照。

⑰ 唐代以前では、馬話16のみが例外的に『詩経』に及んでい